

(論文内容の要旨)

ヘルマン・ヘッセの文学は、世界中に多くの読者を獲得している一方で、とりわけドイツや日本において、これまで文学研究の場からほとんど閉め出されてきた。彼の作品を扱った研究も、その多くは伝記的事実との関連や心理分析・東洋思想の影響といったきわめて限定された視点からのものでしかなかった。本論文は、ヘッセ研究をめぐるこうした状況を踏まえ、ヘッセの小説自体に向き合い、これまで見過ごされてきた「身体」のモチーフに着目して作品を読み解こうとする試みである。

第1章 足を奪われた人々・放浪する人々―初期作品におけるアウトサイダー像について

ヘッセの初期の作品『ペーター・カーメンツィント』、『車輪の下』、『ゲルトルート』には、いずれも足の不自由な人物たちが登場する。彼らは身体障害者として、世間からアウトサイダーの烙印を押された存在であり、そこにはヘッセが幼少時代から抱き続けていた家庭や社会からの疎外感が投影されている。またこの時期の作品には、もうひとつのアウトサイダーのタイプとして、放浪者の姿が描かれる。彼らは、自らの意志で社会から飛び出すことのできる自発的アウトサイダーである。健康な足で自由に社会とその外部とのあいだを越境する放浪者たちにたいして、障害者たちの歩行の困難さは、疎外されながらもそこから一步も出ることができない状況の象徴である。ここに彼らの障害が共通して足に負わされている理由があると言える。しかし、作者は彼らを単なる惨めな存在で終わらせようとはせず、不自由な足のマイナス点を埋めるかのように特殊な能力を付与している。特にその能力が音楽的才能としてあらわれる『ゲルトルート』では、主人公クーンは父が足に負ったけがによって結果的に命を救われるなど、これまでアウトサイダーの烙印でしかなかった障害を負った足が不可欠の要素として機能するようになる。このことには、当時文学を通じてようやく世間から認められるようになったヘッセが、幼少期から

の疎外の体験を自らの芸術にとって不可欠のものとしてとらえるようになったことが投影されている。このようにヘッセ文学における身体は、初期の段階からアウトサイダーを自認する作者の社会との関係を映し出すものとして機能している。

第2章 叶えられた理想と失われた身体—ヘッセ文学の転換期における「顔」のモチーフについて

第一次大戦後、ヘッセの作品からは身体描写が欠落してゆく。それはヘッセが自然や故郷、芸術という初期のテーマから、「内面的自己の探求」というテーマへとその文学を大きく転換させた時期と重なる。しかし、その転回点をなす作品『デミアン』では、「顔」という身体器官が重要な役割を果たし、これ以降『クラインとワグナー』、『クリングゾルの最後の夏』、『シッダールタ』において、「顔」は様々なヴァリエーションで描かれるようになる。それらの「顔」の共通点は、自己の象徴として向き合う対象になっているという点である。シンクレアが向かい合うのはいずれもデミアンの顔であるが、彼はそこからデミアンの超人性を読み取り、その顔の中に自分の顔を見出すことによって、間接的に自己の広がりを感じてゆく。クラインは鏡に映った自分の顔に殺人鬼を見ることで自己の多様性を突きつけられ、クリングゾルは自画像を描くことで自己と真正面から対峙しつつそれを表現し、シッダールタは顔に自己の普遍性を映し出す。作品ごとにバトンをつなぐようにして深まってゆく彼らの自己認識と自己実現の道のりが、「顔」との関わりの変化の中にあらわされているのである。また、「顔」の持つもうひとつの役割は、主人公が到達した自己の内実を明らかにすることにある。クリングゾルの自画像には万物の混沌が描き込まれ、シッダールタの顔はさらに強い思想性を帯びた生命の川を映し出す。とりわけシッダールタにおいては、絵という表現手段を介してではなく、自己の象徴である「顔」に直接生命の川が映し出されることで、そうした宇宙的な広がりが自己の内に存在することが示され、「顔」はこの作品にいたるまでの主人公たちが探求してきた真の自己をあらわす究極の像となる。しかしそこへ向かうにつれて、「顔」からは目鼻口といった造作が失われてゆく。非個性化したシッダールタの顔は、それ自体身体としてのリアリティを失った実体のない顔であり、これはシッ

ダールタが到達した完全な自己実現が不可能であることを暗示するものでもある。

第3章 身体へのまなざし—『湯治客』における身体のリアリティをめぐって

『湯治客』は、内面的な作品世界の頂点を極める『シッダールタ』から、リアルな現実世界を描く『荒野のおおかみ』までのちょうど狭間の時期に執筆された。手記の体裁を取るこの作品で、1920年代ヨーロッパの市民社会の象徴であるバーデンの湯治場を舞台に、そこに立つ自分自身を描くことによって、ヘッセはこれまで目を背けてきた現実社会に生きる新しいアウトサイダー像を示そうとした。それは身体を鍵とする二つの体験を通じて描かれている。最初の体験は、ホテルの隣室で騒音を立てるオランダ人への憎悪に始まる。その憎悪の原因は実際には、そのオランダ人の堂々とした体躯を目にすることによって呼び覚まされるヘッセ自身の他者に対する潜在的な劣等感にあった。そもそも湯治場は病によって結びついたコミュニティであるにもかかわらず、ヘッセはそこで自分よりも重症の患者を見つけることで自らを差別化し優越感を得る。オランダ人への憎悪はその反動ともとれる。しかし、ヘッセは想像の中で「オランダ人の無数の身体の像」を創り出し、全ての人間同様彼もまた死にゆく運命にあることを確認し、彼への憎悪とその背後にある自らの劣等感を克服する。もう一方の体験は、食堂で起きるドッペルゲンガー体験である。湯治場に滞在しその市民的生に耽溺するうちに、ヘッセの病状は悪化し、彼の病める身体は病める現代社会の象徴となってゆく。そんなある日、彼は突然食事をする自分とそれを見つめる自分に分裂する。これによりヘッセは自己を客観的に見ることで、湯治場の生活にはまりこんだ自らと決別し、高笑いのうちに小市民的社会とユーモアによって和解する術を手に入れ、これをきっかけに病から回復する。この二つの体験を通じて主人公ヘッセは自身と社会との関係を見つめ直し、何もかもを許容することのできる境地に立ったアウトサイダーの立場を手に入れることに成功したように思われるが、そこでの身体の位置づけに注目すると必ずしもそうとは言えない。オランダ人の身体やヘッセの病んだ身体はたしかに、主人公ヘッセに他者への劣等感や小市民的生への傾倒という、作者がこれまで目を背けてきた社会に対する意識を現実として突きつけている。ところが物語においては、主人公ヘッ

セは、それらの生身の身体をあたかも克服されるべき偽りとして位置づけ、それらに対抗するかのように想像の中に身体の像を創り上げたり、あるいは自らの身体を外部から見つめたりして、現実の身体が持つリアリティがその効力を失うような方法によって問題の解決を図る。つまり、ここでも現実を受け入れられることはなく、

『湯治客』における身体のパラドクスは、現実社会に生きる新しいアウトサイダー像を思い描きながらも、いまだ現実を受け入れられない作者のジレンマを反映しているのである。

第4章 ハリー・ハラーの痛む足—『荒野のおおかみ』における身体の消去と回帰

『荒野のおおかみ』の主人公ハリー・ハラーの身体は、「痛み」というリアリティをともなあって描かれる。ハラーの身体は痛みのために引きずる足によって特徴づけられており、とりわけ階段の上り下りの困難さが強調される。自分の屋根裏部屋と秩序に満ちた市民の住居のある二階とをつなぐ階段を行き来するハラーの足の「おぼつかなさ」は、小市民的世界への憎悪と憧れの間で揺れる彼の葛藤を示している。この足以外にもハラーの身体は、人間とおおかみの狭間を生きる苦悩を感じたときにそれを痛みとして表現する。この小説のストーリーは、魔術劇場という異次元での完全な自己解体を目指して直線的に進んでゆくが、そこにいたるまでの道のりにおいてダンスや麻薬を経験するようになったハラーの身体は、痛みが取り除かれ、時間と場所をともなう明確な所在を示さなくなり、その存在感を失っていく。そして魔術劇場の入り口となる仮面舞踏会では、踊るハラーの身体は周囲の人々の身体と同化し大きなうねりの一部となり、その持ち主から完全に切り離される。ところで、この作品には「荒野のおおかみに関する論文」というハラーにとって道しるべとなる文章が挿入されているが、そこでは精神の多元性に目を開くことが主張されるとともに、身体の一元性はその認識を阻むものとして位置づけられている。この論文によって作者自身もまた、生身の身体を持つハラーを描いたにもかかわらず、彼の目指すゴールにおいては、その身体の一元性を越えて生の多様性を表現するという課題を負うことになる。その第一段階として作者はハラーの身体を消し去った

のだ。そして魔術劇場でハラーは鏡の破片やチェスの駒の中に無数の身体の像を見つめることで自己の多元性を理解し、作者の表現上の試みも成功したように思われる。ところが、結局魔術劇場は幻覚に過ぎず、そこから覚めたハラーは相変わらず痛む足をひきずって階段を上り下りする荒野のおおかみに戻る。この点において『湯治客』とは異なり、この痛む肉体のリアリティは、ハラーの二元性を生きる生が錯覚ではなく、解決不可能な現実なのだということを突きつけることになる。また、初期の作品に登場する障害者たちの不自由な足と比較すると、ハラーの足は痛みという内的実感をともなっており、ヘッセの描くアウトサイダー像が、他者によって貼られたレッテルから、自らによって規定されたものへと変化したことを示している。

第5章 ハリー・ハラーのさまよう足—『荒野のおおかみ』における歩みの持つ意味について

ヘッセの作品において、主人公の多くはさまよう人間として描かれている。『荒野のおおかみ』の主人公ハリー・ハラーもまたその一人である。しかし、この作品以前の主人公たちの歩みには、ふたつの象徴的な空間を移動することによって新たな生へと越境するという目的が付与されていたのにたいして、ハラーは越境のしようのない閉塞した都市の内部をただ徘徊する存在として描かれている。越境という目的を失った彼のさまよいは、その歩み自体が持つ意味を強調することになる。都市をさまよう主人公の姿は、『クラインとワーグナー』や『湯治客』においても描かれてきたが、『荒野のおおかみ』でハリー・ハラーの姿に結実するにあたって、都市の細部が書き込まれ、リアリティを増した都市はこの作品が執筆された1920年代そのものの象徴と変化してゆき、これにより彼の歩みが持つ意味が、その時代との関わりの中で理解されるべきであることが示唆される。その解釈の鍵となるものが、魔術劇場のひとつの部屋で繰り広げられる「自動車狩り」の場面である。この小部屋の狂騒を支配しているのは、対立する認識の虚構である。それは人間とおおかみの狭間で苦しむハラーの精神病と、それが体現する「狭間の時代」の病の原因である。どちらか、あるいはたったひとつの論理がすべてを解決するかのような錯

覚とそこから生まれる極端な思考にその病理を感じていたヘッセは、乗る者に万能感を与え猛烈なスピードで疾走する自動車に、「狭間の時代」に人々が飛び乗ったひとつひとつの思想潮流を、そして完全にコントロールしていたはずの「自動車」によって逆にその歩みを支配される人々の姿に、人々が極端な思想を唱えることで自らがその硬直状態に飲み込まれ、個人としての存在を失ってゆく様子を描き出す。そして、無防備な一人の歩行者を、その狂騒の中で唯一脅かされることのない自由な存在としてそれらに対置させる。その姿は、歩くという人間の原初的な行為を何にも依拠せず自己を生きることと重ね合わせることによって、ハラーの歩みの意味を示唆している。しかし、魔術劇場の幻覚の中にとどまることができないハラーの足取りは、「歩行者」のように軽いものではない。痛む足を引きずりながら都会をさまよい続けるハラーの歩みの中に作者は、現実社会の中で一人自己を生きようとするアウトサイダーの密かな戦いを描くのである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ヘルマン・ヘッセ(1877-1962)の初期から中期へといたる作品群を、「身体」という観点から読み直そうとする試みである。トーマス・マンやカフカといった、ヘッセと同時代の作家たちにかんする近年の研究において、「身体」がキーワードの一つになっているのとは対照的に、ヘッセの文学における「身体」は、日本はもとよりドイツ語圏の研究においてもこれまでほとんど論じられてこなかった。その理由は、従来の研究において、ヘッセが登場人物の外面描写に重きをおかない、内面的・精神的な傾向の強い作家として捉えられてきた点にある。それにたいして論者は、作品テキストの綿密な読解によって、身体のもティーフがヘッセの文学において重要な役割を果たしていることを論証しようとするのである。

第1章で論者は、『ペーター・カーメンツィント』(1904)から『車輪の下』(1906)をへて『ゲルトルート』(1910)へといたるヘッセの初期の小説において、足の不自由な人物たちと、自らの足で社会から飛び出してゆく放浪者たちが、アウトサイダーの二つのタイプとして対比的に描かれていることに着目する。とりわけ『ゲルトルート』では、足の不自由な主人公クーンに音楽家としての才能が与えられており、ここから論者は、初期の作品においてすでに、身体のもティーフがアウトサイダーとしてのヘッセの自己意識と密接に結びついていたことを読み取るのである。

第2章では、ヘッセ文学の転換点をなす『デミアン』(1919)、『クラインとワーグナー』(1920)、『クリングゾルの最後の夏』(1920)、『シッダールタ』(1922)の4篇の小説が論じられる。論者は、自己の内面の探究へと向かうにつれてしだいに身体描写が欠落してゆくこれらの作品のうちに、顔のもティーフが共通してあらわれる点に注目する。この4作品に見られる顔のもティーフの変遷を、主人公たちの自己認識と自己実現の深化の過程として読み解く一方で、論者はまた、しだいに理想化され、非個性化されてゆく顔が、そのことによって身体としてのリアリティを失ってゆくというパラドクスを指摘するのである。

第3章で論者は、ヘッセ自身の湯治体験にもとづく作品『湯治客』（1925）を取り上げる。主人公の身体の病とその回復過程を描き出すこの作品では、1920年代ヨーロッパの市民社会の縮図ともいうべきバーデンの湯治場を舞台にして、現実のなかに生きるアウトサイダー像を提示する試みがなされる一方で、最終的には主人公の病んだ身体がもつリアリティを無効にするかたちで快癒がもたらされる。ここに論者は、現実と理想とのはざまで揺れるヘッセ自身の姿の反映を見て取るのである。

第4章と第5章では、中期のヘッセの到達点を示す小説『荒野のおおかみ』（1927）が分析される。この作品の主人公ハリー・ハラーは、痛む足を引きずって登場する。小説の展開とともに、その身体のリアリティはいったん消去されるが、最後に彼は再び、痛む足という生身の身体をそなえた存在へと立ち戻る。論者はこの過程を、ヘッセが主人公の身体の一元性を解体することによって精神の多元性を確保しつつも、アウトサイダーの存在を理想化することなく、その苦悩を解決不可能な現実として描き出したことの証しとして解釈する。さらに論者は、ヘッセの初期の作品に登場する、都市から自然へと越境する放浪者たちとは異なり、都会のなかを徘徊するハラーの歩みのうちに、時代状況とのかかわりを読み取ろうとする。それは、もはや自然という逃げ場をもたない時代と向き合い、現実のなかでただ一人自己を生きようとするアウトサイダーの密かな戦いとして捉えられるのである。

結語において論者自身が述べているように、『ナルチスとゴルトムント』（1930）をはじめとする後期の作品をも視野におさめることができたなら、本論文はさらにスケールの大きなものになったであろうと思われる。だが、身体という観点からヘッセの文学に新たな照明を当てたのみにとはとどまらず、身体のもティーフの変遷が、ヘッセ文学の根底をなすアウトサイダー像の深化の過程と深くかかわっていることを明らかにした点において、本論文は従来のヘッセ研究に新たな知見をつけ加えるすぐれた成果として高く評価することができる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2009年2月17日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。